

# 「尚家文書」を用いた尚典・尚昌の葬儀についての検討 —小笠原伯爵家との婚姻関係に着目して—

さくらざわ まこと  
櫻澤 誠

多文化教育系（社会科教育部門）

（2024年5月1日 受付）

（2024年9月30日 査読完了）

**抄録：**本稿では、尚典（1864-1920）、尚昌（1888-1923）の葬儀がどのように変遷していくのかについて、新たに公開された「尚家文書」を用いながら検討した。1915年に行われた尚昌と小笠原伯爵家・百子との婚礼が小笠原流で行われたことを契機として、東京尚家邸の儀礼の「日本風」化が進んでいく。また、百子の姉・照子は津軽伯爵家に嫁いでいたが、東京尚家邸における尚侯爵家と小笠原伯爵家・津軽伯爵家との結びつきは深まっていく。1920年に尚典が死去し、尚昌に代替わりすると、儀礼の「日本風」化は決定的となる。さらに、1923年に尚昌が死去すると、東京での葬儀および埋葬には、小笠原伯爵家・津軽伯爵家が深く関与することになったのである。

**キーワード：**尚家文書、尚典、尚昌、沖縄

## I はじめに

本稿の課題は、尚典（1864-1920）、尚昌（1888-1923）の葬儀がどのように変遷していくのかを、主に「尚家文書」を用いながら明らかにすることである。具体的には、小笠原伯爵家との婚姻前後の尚侯爵家における婚礼や正月における儀礼様式の変化などをふまえつつ、葬送儀礼が変遷していく過程を検討していく。

最後の琉球国王・尚泰（1843-1901）の葬儀については、すでに「尚家文書」を用いた藤本仁文の詳細な研究<sup>1</sup>がある。一方、尚泰長男・尚典の葬儀については、伊集守道・鈴木悠の研究<sup>2</sup>があるものの、葬列写真や新聞資料、尚泰との比較などによる検討であり、「尚家文書」を用いて分析を行っているわけではない。尚典長男・尚昌の葬儀についての研究は皆無である。

こうした状況はひとえに史料環境によるものだといえる。1995～1996年に「琉球国王尚家関係資料」が尚家から那覇市へ寄贈され、2006年に国宝指定されるなかで、その文書・記録類にあたる「尚家文書」の整理公開が進んだものの、国宝指定分は1902年までに作成された文書に留まるからである。だが、2017年に尚家から那覇市へ追加寄贈され、筆者（櫻澤）が関わるなかでデジタルデータ化を行い、2021年から那覇市歴史博物館において順次公開されている「尚家文書」の中心は1903年以降の国宝未指定分であり、そこには尚典、尚昌の葬儀に関する簿冊も含まれている<sup>3</sup>。

本稿では、新たに公開された「尚家文書」を用いつつ、改めて尚典の葬儀について東京側からの関わりを検討する。また、尚泰・尚典が首里の玉陵に葬られたのに対して、東京で埋葬されることになった尚昌の葬儀についても、初めてその実態を明らかにする。

ただ、1903年以降の国宝未指定分「尚家文書」には、史料群としての限界があることも確認しておかねばならない。基本となるのは各年毎にまとめられた「日記」「庶務書類」だが、本稿で扱う1903～1923年に関し  
て言えば、「日記」はすべて現存するものの、「庶務書類」については1903～1908年、1919～1920年が現存しない。また、儀礼関係についても、「日記」には記載のある尚昌の「御婚礼日記」（1915年）や尚昌長女・文

子の「御誕生日記」（1917年）が現存しない<sup>4</sup>。

さらに言えば、現存史料は主に東京尚家邸において作成・保管されたものであり、沖縄（首里）の中城御殿側の情報は東京尚家邸に伝えられ記録されたものに限られる。史料の性質上、詳しい経過や心情まで確認することはまれであり、傍証を積み重ねていくことも必要となる。そのようななかで、尚侯爵家の儀礼については、倉成多郎が新たに公開された「尚家文書」の「日記」や儀礼関係簿冊を用いつつ、「丁子風炉」を素材として、尚侯爵家における近世近代の連続性と、尚昌が小笠原百子と婚姻した後の正月飾りの変化を指摘しているが、「丁子風炉」の使用有無など「装飾」の確認に留まっており、変化の時期についても明確には示されていない<sup>5</sup>。本稿では、倉成の指摘をふまえつつ、「装飾」以外の変化や、「庶務書類」も含めて諸儀礼を検討することで、そのような儀礼の変化を詳細に位置づける。

こうした1903年以降の国宝未指定分「尚家文書」の史料群としての限界は、近年積み重ねられている近代華族研究<sup>6</sup>の成果のなかに尚家を位置づけようとする際に、大きな困難を生じさせると言わざるを得ない。今後、新たな関連史料が発見されることを期待しつつ、現在は、既存史料に基づき実証を積み重ねていく段階だと考えている。

以上をふまえ、本稿は以下の2章で構成される。Ⅱでは、尚泰葬儀（1901年）から尚典葬儀（1920年）以前までの尚侯爵家の動向を検討する。具体的には、尚典が首里に留まるなかで尚典（沖縄）・尚昌（東京）の二元体制が形成されていく過程、および尚侯爵家の儀礼における転機となる尚昌の婚礼が焦点となる。Ⅲでは、尚典葬儀から尚昌葬儀（1923年）にいたるまでの尚侯爵家の動向を検討する。具体的には、尚典葬儀時の東京尚家邸での対応、そして、親戚としての小笠原伯爵家、津軽伯爵家の存在がその焦点となろう。さらには、尚昌葬儀の詳細を明らかにするとともに、尚昌が東京で埋葬されることになった要因を前章の内容をふまえつつ検討する。なお、「尚家文書」を引用する際には、適宜、旧字体を新字体に改め、句読点を付したこと、また、電報については、適宜カナを漢字に変換したことをお断りしておく。

## Ⅱ 尚泰葬儀以降の動向

### 1. 中城御殿と東京尚家邸の二元体制化

1901年8月19日、尚泰が東京で死去する。当初は東京にて葬儀を執行する予定であったが、29日に首里にて葬儀が行われ、玉陵に埋葬されることとなる<sup>7</sup>。

8月23日、尚泰の遺体とともに、尚典は親族と東京を出発している。8月24日付で尚典名で爵位局長宛に出された「旅行御届」には、尚典のほか、尚昌、尚景（尚典次男）、尚秀（尚泰六男）、尚旦（尚典三男）、尚光（尚泰七男）、尚時（尚泰八男）、真鶴金（尚泰夫人、松川御殿）、尚まさ子（尚泰五女）、真鍋樽（尚泰次女、安室御殿）、尚やゑ子（尚泰六女）、尚きみ子（尚泰八女）の名が順番に記されていた。葬儀の後、10月17日には、尚昌、尚景、尚秀、尚旦、尚光が上京しているが、尚典はそのまま首里に留まったようである<sup>8</sup>。

1902年5月14日、尚典は尚順（尚泰四男、男爵）とともに上京している。しかし、7月27日には、尚典は再び尚昌、尚順、今帰仁朝和（男爵・今帰仁朝敷長男）とともに東京を出発する。これは、尚泰一周忌を首里で迎えるためだと思われる。その後、尚昌のみが20日に沖縄を発ち、29日に上京している<sup>9</sup>。

1905年12月29日、尚典は約3年5か月ぶりに上京するが、翌1906年4月15日には帰郷のため東京を出発<sup>10</sup>。以降、生涯上京することはなかった。

1907年7月1日、尚昌は、尚景、尚秀、尚時らとともに沖縄へ向けて東京を出発し、9月2日には帰京しているが、おそらく尚泰の七回忌に合わせたものと思われる。この間、家従・嵩原安亘が7月22日付で家扶心得を命ぜられているが、これが翌年の人事に向けた布石であったと考えられる<sup>11</sup>。

1908年4月10日、護得久（朝章）から伊是名朝睦宛に「貴下沖縄詰家扶、嵩原東京詰家扶ヲ命ゼラル、事務引継ハ、控ヘラレ、ソノ間、コレマデ通り、事務取扱ノ方何アフ」との電報が届く。1908年の「庶務書類」が欠落していることもあり、人事の正式な日付がわからないが、4月30日に「沖縄御邸家扶知花朝章辞職相成候」とあることから、尚泰時代から長年尚侯爵家を支えてきた沖縄詰家扶・知花朝章が辞職する一方で、東京詰家扶であった伊是名朝睦を新たに沖縄詰家扶とし、代わって東京詰家扶に嵩原安亘を置くという人事がなされたことが確認できる<sup>12</sup>。1845年生の嵩原は、26歳で尚典の御側仕となり、1879年の「琉球処分」時には

尚典とともに上京、その後、近習役となっており、さらに「東京詰家扶となり、傍ら嗣子尚昌氏の伝育係として又護得久朝惟君と協力して東京本邸の監督に力め」ることとなった<sup>13</sup>。

ちょうどこの時期、『東京朝日新聞』の連載「大名華族の家庭」において、尚典が「琉球居住」であることに加えて、「典はこゝに在つて平生好んで和漢の書を読み倦めば邸内に設けある射場にて熱心に大弓を引いて居る」と紹介されているが<sup>14</sup>、実態は不明である。また、1908年10月21日付で東恩納寛惇が「御邸庶務囑託」となり、「尚泰侯実録」の編纂が進められていくことも、当該期の尚侯爵家を考える上で重要な出来事だといえよう<sup>15</sup>。

「日記」において、さらなる尚典の体調悪化についての記述が見られ始めるのは、1909年6～7月頃である。6月10日からインフルエンザにかかり、15日には肋膜炎、24日には気管支炎を併発し、7月3日には結核性肋膜炎と診断される。東京尚家邸では、良医の選定派遣に動き、5日、監督・護得久とともに南部孝一博士が沖縄へ発つが、同日頃から状態は改善しはじめたようである。11日、南部は沖縄へ到着して診察し、肺尖カタルと肋膜炎との診断を下している。南部は毎日診察を続け、尚典が快方に向かうなかで、29日には帰京している<sup>16</sup>。

この間、尚昌も「御口御療治ノ為」に6月19日から7月29日まで入院していた。8月22日、尚昌は「御機嫌伺旁御静養ノ為」として帰郷の途に就き、12月3日に帰京するが、この間、10月13日付にて学習院を退学している<sup>17</sup>。

そして、約1年を経た1910年12月28日の「日記」には、「尚昌様、来年御洋行被遊候段、天聴ニ達シ、本日御手許金ヨリ、特旨ヲ以テ、金五百円也御下賜相成候」とあり、さらに、在京の尚順から沖縄詰家扶・伊是名朝睦宛に「侯爵様ヨリ、宮内大臣宛御礼ノ電報アリタシ」との電報が送られる。それに対し、翌29日、伊是名から尚順宛に「尚昌様ノ御洋行ハ来年ノイツ頃ナルカ、委細報セトノ命アリ」との返信電報が届く。東京尚家邸と中城御殿との認識のズレが垣間見え、東京中心で洋行の話が進んでいたことがうかがえる。それに対して、30日、尚順は伊是名宛に「マダ確定セヌ、ソノウチ御帰国、伺ノ上決メル、議会後、私、御供シテ帰ルツモリ」と送っている<sup>18</sup>。

だが、年が明けた1911年1月9日には、尚昌は「会話御研究ノ為、東京高等商業学校教師フアーデル氏（英国人）方ニ御寄宿被遊」こととなり、約2か月後の3月10日に帰邸する。結局、尚順とともに尚昌が「御機嫌伺並ニ御暇乞ノ為」、沖縄に向けて出発したのは4月2日であった<sup>19</sup>。沖縄では、「首都那覇を始め各郡部の官民一大留別会を那覇公園にて開催せり来会者千数百名勇壮活発なる余興あり各中等学校生徒は連合軍を組織して盛大なる発火演習を為し其他各種の余興あり見物人山を為し近年稀なる盛会」であったという<sup>20</sup>。

5月11日に帰京した後、連日の祝いを受け、23日には盛大な見送りのもと、神山政良を随行員としてロンドンに向けて出発する。途中、ホノルルを経由して、沖縄県人からの「盛大なる歓迎」を受け、さらに、サンフランシスコ、ニューヨークを経て、7月18日、ロンドンに到着している<sup>21</sup>。

## 2. 尚昌と小笠原百子との婚礼

1914年7月に第一次世界大戦が勃発。尚昌は3年間のオックスフォード大学での留学を終え、随行員の神山政良とともに、11月21日、英国を出発し、スエズ運河、シンガポール、香港などを経て、1915年1月6日、神戸にて帰朝。尚景、尚旦、尚時、尚暢、嵩原家扶らが神戸にて「御出迎」している。翌7日には東京に到着。東京駅でも大勢が出迎え、東京尚家邸では新御殿御広間にて「御祝」が行われている。9日には「天機奉伺ノ為メ御参内」し、その後もしばらく祝事が続いた後、1月30日、尚昌は尚順や神山政良らとともに沖縄へ向けて出発し、5月4日には帰京している<sup>22</sup>。

尚昌と神山が帰国すると、二人の婚姻話が進むことになった。神山については、1914年12月3日付の沖縄詰家職・羽地朝資から東京詰家扶・嵩原安亘宛の書簡に、「八重子様御婚礼之儀、神山家より願立ニ依り、政良殿帰帆之上者、早速挙行被仰付筈」とあることから、帰国前に尚泰六女・八重子（やゑ子）との婚姻が決まっていたことがわかる<sup>23</sup>。1915年1月20日付で宮内大臣へ婚姻願書が提出され、即日認許された<sup>24</sup>。3月4日には沖縄にて「御婚礼之儀」が行われ、21日には、尚昌よりも一足早く上京した神山夫妻が東京尚家邸を訪れている<sup>25</sup>。

一方、尚昌については、6月25日、護得久から尚順宛に「御縁談ノ件、小笠原伯爵家ト交渉纏リ、御報告

並ニ打合ノ為早便帰ル」との電報が送られているのが、「日記」に表われる最初の情報だと思われる。護得久は7月3日に沖縄へ到着するが、それを待たず、1日には嵩原から護得久宛に「媒酌人伊藤公爵ニ御依頼シテ如何」との電報が送られている。4日には、護得久から嵩原宛に、「御縁談ノ件、御満悦思召メサル、御招キ並結納ノコト、日比氏相談シテ行ハレタシ」との電報があった。尚典はこの縁談に満足していた様子がうかがわれる。また、「日比氏」とは元沖縄県知事・日比重明のことであり、同日には東京側からの「媒酌人ノ件如何、日比氏ヨリ催促アリ」との発電が記録されている<sup>26</sup>。日比は、1914年3月の尚光の婚礼および1918年12月の尚旦の婚礼の際に媒酌人を務めているが<sup>27</sup>、尚昌の婚礼にあたっても相談を受けていたことになる。

7月7日、嵩原家扶が小笠原伯爵家に案内状を持参した上で、17日、尚昌は「小笠原家ト御親睦ノ為メ、同伯爵外御八名ヲ華族会館へ御招待、親睦会御開催」している<sup>28</sup>。当日の様子は、嵩原安宜から護得久朝惟・伊是名朝睦に宛てた報告（7月26日付）<sup>29</sup>から確認することができる。それによれば、「午后六時ヨリ八時三十分迄、御互充分ニ御歓談被遊申候、殊ニ尚昌様ノ御如オナク御接待振リニハ、日比重明殿、漢那中佐殿ノ激賞セラルゝ處、小職等一同難有、恐悦奉存候」と記されている。また、「当日ハ御準備ノ為メ、日比重明殿ノ御紹介ニテ、式部属黒沢滋太郎氏依頼致シ、小職、百名家扶心得三人会館へ罷越シ、万端抜目ナク首尾能ク被御済申候」とのことであった。報告には当日参加者予定者も付されており、小笠原伯爵家側は、小笠原長幹伯爵、同夫人貞子、同妹百子、同弟豊、同弟小笠原長丕子爵に加えて、津軽英鷹（病気の為欠席）、同夫人照子（小笠原長幹妹）、小沢武雄男爵、同夫人桑子の9名（1名欠席）、尚侯爵家側は、尚昌、漢那憲和、同夫人政子、神山政良、同夫人八重子、日比重明、同夫人松子の7名であった。

翌18日には、嵩原から護得久に宛てた電報で、伊藤公爵が媒酌人を承諾した旨が伝えられている。また同日、今度は小笠原伯爵家の家扶・小野次郎が案内状を持参し、24日に伯爵家にて親睦会が開かれている。この間、20日には尚昌が式部官を拝命しており、侯爵家では慶事が重なることとなった。そして、29日、小笠原伯爵家との間で結納が取り交わされる。同日中には、婚姻願書が宮内省に提出されている<sup>30</sup>。

「御結納」の詳細は、「庶務書類」に綴じられた7月31日付の嵩原から伊是名宛の報告で確認できる<sup>31</sup>。添付の「御結納御取交ノ事」によれば、7月15日に日比重明宅にて尚侯爵家の嵩原家扶、百名家扶心得と小笠原伯爵家の伊藤家令、小野家扶が会合諸事打合を行い、準備を進めていた。当日の式次第は小笠原伯爵家において詳細に定められているが、下記のように、儀式が行われた新御殿の飾付には「丁子風炉」が用いられるなど、尚侯爵家の慣習も反映されていた。

#### 一、当日新御殿飾付

御床間 古信筆 壽老人 夫婦鶴 立花 松竹梅  
御床脇 上棚 絵巻物 下棚 料紙硯箱  
書院 丁子風炉

倉成多郎によれば、「正月に丁子風炉をたくという行為は、近世琉球以来、近代にはいっても行われており、琉球王国の遺風を伝える正月儀礼の一つであり、「丁子風炉」は「独自性を持った琉球式室内飾り」だとされる。倉成が述べるように、東京尚家邸にて行われた、1909年12月の尚泰五女・政子と漢那憲和との「御婚礼」および1914年3月の尚泰六男・尚光と米原福子との「御婚礼」の飾りつけのほか、1915年までの正月飾りにおいても、「丁子風炉」が使用されている<sup>32</sup>。倉成の検討は「日記」に留まっているため、尚昌・百子の結納・婚礼には触れていないが、結納時点では、その慣習が残されていたことになる。

8月2日には、尚昌は沖縄へ向けて出発。4日には宮内大臣より婚姻が認許されており、その旨は神戸滞在の尚昌へ直ちに打電されている。10日に沖縄へ到着し、約2週間後の23日には沖縄を出発、30日には帰京している<sup>33</sup>。

ちょうどこの時期、『東京朝日新聞』1915年8月18日付に次のような記事が掲載されている<sup>34</sup>。

△先日式部官になつた尚昌君は旧琉球王尚侯爵の長男で今年二十八歳、日本語も英語も却々に巧いが琉球語と来ては薩張駄目△處が父なる典君は又全くの琉球育ちとあつて昌君とは反対に日本語は片言葉位な處で万事が琉球語本位である△ソコデ典君と昌君は親子の間柄ながら少し込み入つた話になると双方共意味



が通じないは珍談

実際には、1888年生まれの尚昌は1896年に上京するまで首里で育っているのだが<sup>35</sup>、このような記事が書かれた前提として、沖縄に留まる尚典と洋行帰りの尚昌には相当な距離があると認識されていたことに注目しておきたい。

10月25日には、小笠原伯爵家の伊藤家令、小野家扶が東京尚家邸を訪れ、日比重明、嵩原安亘、百名朝計と会合、諸事打合せを行い、12月13日にも日比重明と大瀧善吉（後述）が来邸して「御式ノ予習」をするなど、準備が進められ、14日の東京尚家邸での御婚礼当日を迎える<sup>36</sup>。

この間、『読売新聞』1915年11月25日付には、嵩原安亘の言葉が紹介されている<sup>37</sup>。それによると、「御約束は本年の四月に定まつて、十一月中にお式を挙げられる筈でしたが、恰度御大典に当りましたので止むなく来月に延ばしました」という。「四月」とあるのは6月の誤りであろうか。また、「侯爵御夫妻は何れも琉球に居られますが、年に二三回は必ず御見えになつて、彼是と御指図があります」と述べている。先に触れたように、1906年以降、尚典は上京していないのだが、「皇室の藩屏」たる尚侯爵としての体面がそう言わせたのであろうか。さらには、御婚礼について、「琉球式にするか純日本の小笠原式に致すかと評議がありましたが／△結局小笠原式になすこととなりました」と述べている。なお、御大典時には、尚昌は式部官として、11月6日から22日まで京都へ出張している<sup>38</sup>。

「日記」には「詳細ハ庶務綴及御婚礼日記ニアリ」と記されているが、残念ながら「御婚礼日記」は現存しない<sup>39</sup>。ただ、「御婚礼」の詳細は、「庶務書類」に綴られている嵩原から伊是名宛の報告（12月29日付）<sup>40</sup>で確認できる。報告の冒頭には、「御成婚後、尚昌様ニハ若殿様、百子様ニハ若奥様ト申上候」と付記されており、婚礼を機に、呼び名が変わったことが確認できる。そして、「兼々諸華族方ノ御例及婚礼儀式ノ書籍等ヲ参考シ、一切ノ事項ヲ組織シ、小笠原伯爵家トモ諸事打合せ、式者ニハ伊藤公爵ノ御指定ニ依リ、正統小笠原流ノ大家大瀧善吉氏ニ依頼万端準備致シ」たとあり、さまざま参考にしたものはあるが、「正統小笠原流」に則り行われたことが述べられている。

その準備は細部にまで及ぶが、例えば、「御入輿並御婚礼儀式ノ事」<sup>41</sup>として、流れが事細かに決められており、「御儀式ノ間」は次のように用意された<sup>42</sup>。

御儀式ノ間ニハ左ノ儀物ヲ供フ

皆子餅	三方
瓶子	三方
高砂島臺	
瓶子	三方
皆子餅	三方
三ツ組土器	三方
御下捨土器	
初饗	三方
稲穂臺	床上ニ備置ク
御床脇飾付	
上棚 絵巻物	
下棚 料紙硯箱	

飾り付けからは「丁子風炉」が消え、「正統小笠原流」としての要素がより明確となっている。小笠原流に則って細部まで計算された御婚礼が東京尚家邸において行われた。結納・婚礼と段階的に変化していったことがうかがえる。このことが、次節で見ていくように、その後の各種儀礼にも影響を及ぼしていったものと考えられる。

### 3. 東京尚家邸における儀礼の変化

倉成多郎が述べるように、東京尚家邸における正月飾りは、1916 年を境に大きく変化している。正月飾りから「丁子風炉が消え鏡餅、密柑、昆布、勝栗、木炭、絵巻物、料紙硯箱というアイテムが出現する。これは、単に丁子風炉がなくなったというだけでなく、質的に正月飾りを変質したといえる。1916 年以降の正月飾りが“日本風”に質的に変容したといえる」という<sup>43</sup>。前年の尚昌・百子の結納の際に、絵巻物や料紙硯箱が飾られたのはすでにみたとおりだが、正月飾りにも反映されたことがわかる。また、戦前の「日記」が現存する「1926 年まで同様の記述がつづくが、徐々に記述の量が増え、アイテムが増えていく（中略）これは、導入した新式の正月飾りが拡張、補強、整理されていく様子を伝えるものと考え」とし、変質の契機として、尚昌の宮内省式部官就任と、小笠原伯爵家との婚姻を想定している<sup>44</sup>。式部官の仕事がどこまで影響を持ったのかは不明だが、少なくとも、すでにみたように、小笠原伯爵家との「御婚礼」に際しては、「小笠原流」による指南を受けており、それが正月飾りを始め、東京尚家邸における様々な儀礼に変化を及ぼしていったということになる。

元日の記述には「装飾」以外にも、変化を見ることができる。尚昌留学前の最後の正月である 1911 年では、「新御殿御広間於テ／尚昌様御始御子部尚順殿尚球殿／御先祖御遥拝被遊候事」と記されているのに対し、1916 年では、「新御殿御広間ニ於テ／若殿様／若奥様御初尚景殿尚時殿尚暢殿尚順殿尚秀殿／御先祖様御遥拝被遊候」と記されている。婚礼後に若殿様・若奥様を使用することになったことは既にみたとおりだが、加えて、王子たちを示す「御子部」が使用されなくなっている<sup>45</sup>。

さらには、これまでの「新年賀表」の差出や、「年賀御名刺御遣」などによる挨拶に加えて、当然ではあるが、小笠原伯爵家など、県外親族による来邸が加わるようになる。1916 年には 1 月 3 日に「小笠原伯爵令夫人、御年始ニ付御来邸」し、「六番地御邸へ御案内、御屠蘇御吸物等被差上」ている。1917 年には 1 月 10 日に「津軽伯爵家々扶大谷津友藏氏、新年御礼并御機嫌伺ノ為メ来邸」、1918 年には 1 月 3 日に「小笠原伯爵御夫婦、年賀ノ為メ御来邸」、4 日に「津軽伯爵御夫婦、年賀ノ為メ御来邸」している<sup>46</sup>。小笠原伯爵家だけでなく、百子の姉・照子が嫁いでいた津軽伯爵家との結びつきも顕著である。

もう一つ、正月の変化として注目されるのが、1920 年から始まる尚昌による「旧藩士諸氏へ年賀御面会」である。事前に「尚家々扶 嵩原安亘」名で通知を送り、1 月 4 日に面会を行っている。「日記」には「詳細ハ庶務綴ニアリ」と記されているものの、残念ながら同年の「庶務書類」は現存しないため、確認できない<sup>47</sup>。翌 1921 年は尚典死去による服喪中であつたが、1922 年 1 月 4 日には 2 度目が行われ、漢那憲和夫婦、神山政良夫婦、幸地朝續、護得久朝光という親族のほか、119 名が東京尚家邸を訪問している<sup>48</sup>。1923 年は尚景死去による服喪中のため、尚昌による「旧藩士諸氏へ年賀御面会」は、1920 年、1922 年の 2 度に留まった<sup>49</sup>。しかし、この年賀御面会が、東京に集う県人と尚侯爵家の「若殿」尚昌との結びつきを強めるものとして企図されたことは疑いないだろう。

さらには、親族の婚礼においても、その変化は表れる。1914 年 3 月 31 日に行われた尚光の婚礼の際には用いられていた「丁子風炉」が、1918 年 12 月 16 日に行われた尚旦の婚礼の際には使用されなくなっている<sup>50</sup>。尚旦の「御婚礼日記」には、「御式其他御料理等ハ、専ラ尚光殿ノ御例ニ準シ、多少若殿様政子様ノ御例モ参照セリ」とあるのだが<sup>51</sup>、実際には、式場飾付に「若殿様」＝尚昌の婚礼を経た変化が明瞭に反映されていたのである。

## III 尚典と尚昌の葬儀

### 1. 東京尚家邸からみた尚典葬儀

1920 年 9 月 20 日、尚典が首里にて死去する。「大正九年九月 従二位様薨去日記 尚家」<sup>52</sup>（以下、「従二位様薨去日記」）は、東京尚家邸における尚典の葬儀に関する記録であり、死去の電報を受けた 9 月 20 日から記載が始まり、12 月 28 日の「御百日祭」で終わる。ただし、この史料は東京尚家邸でまとめられたものであり、東京尚家邸における様子は詳細にわかるものの、中城御殿側の様子は電報等の写しのほかは不明である。加えて、1920 年の「日記」は残存するものの<sup>53</sup>、「庶務書類」が欠如しているため、そこから首里側の状況をつかむことも困難である<sup>54</sup>。

ただ一方で、死去直後から葬儀に向けた東京・沖縄間の電報でのやり取りや、東京での諸届などの経過、東京尚家邸での御遥拜式および弔問者・弔電・御供物等が詳細に記録されており、部分的には1923年の尚昌の葬儀との比較をすることも可能である。そこで、「従二位様薨去日記」をもとに、その動向を詳細に確認しておきたい。

9月20日、沖縄詰家扶・伊是名朝睦から東京詰家扶・嵩原安亘宛の「侯爵様御危篤（九月二十日午後一時受付）」との電報を受けて、尚昌・百子夫妻と尚暢（尚典四男）は午後5時20分に東京駅を出発する。帰郷に際して、宮内大臣宛「御暇願」、宮内大臣宛・式部長官宛「出発届」が提出されている<sup>55</sup>。

しかし尚昌一行の出発と前後して伊是名から尚昌宛に「薨去遊バサル、至急御帰県アレ（午後三時受付）」との電報が届いた。嵩原は東京に残り、東京尚家邸での指揮をとることとなる。「薨去」の報はただちに「在京ノ御近親方へ御通知、且殿、城間恒人殿へハ電報ニテ御通知」されている。また、伊是名から嵩原宛に「危篤ノ段、宮内省へ達セラレタシ」との電報を受けて、「宮内省宗秩寮へ薨去の段、内々御通知」されている<sup>56</sup>。「内々御通知」の意図は後述する。

さらに、監督・護得久朝惟から嵩原宛に、漢那憲和（尚泰娘婿）・神山政良（尚泰娘婿）に手伝いを依頼するようにとの電報が届き、漢那・神山が東京尚家邸に来邸して諸事を打合せし、次の事項が決議されている<sup>57</sup>。

#### 事項

- 一、宮内省・貴族院へ薨去御届ノ件
- 一、御薨去御通知状発送ノ件 範囲ハ御親類、貴族院公爵議員以下全部  
従来御交際ノ御方々  
庚戌会員（若殿様御同窓）
- 一、御遥拜式御挙行ノ件 県人各位へ新聞紙上ヲ以テ通告
- 一、薨去広告ノ件（三新聞） 時事・朝日・日々  
廿三日ヨリ廿五日迄三日間
- 一、御礼状発送ノ件 御供物、御弔詞、御参拝ノ方々へ
- 一、御礼広告ノ件（四新聞） 時事・朝日・日々・国民  
廿七日一日間
- 一、若様御姫様喪服新調ノ件

9月21日、嵩原から伊是名宛に「宮内省ヨリ、御沙汰ナキ由、返事アリ」との電報が送られる<sup>58</sup>。「従二位様薨去日記」には記されていないが、「日記」には、それを受けて伊是名から嵩原宛に「明日前八時薨去ノ旨、発表ノヨテイ、貴族院へモ手続アリタシ」との電報が届く<sup>59</sup>。そして、「従二位様薨去日記」には次の通知控が記されている<sup>60</sup>。

- 一、侯爵様御危篤ノ段、宮内省へ内々御通知スル様、貴殿ニ依り、早速宮内省宗秩寮へ御昇位ノ儀、内々交渉致候處、同寮ニ於テモ詮議致サレ候由ニテ、  
侯爵様ニハ、大正七年従二位ニ昇叙セラレ、年数近ク、殊ニ上位ニナルニ従ヒ、昇叙ノ期間モ長ク相成候ニ付、内規ニ不合、特旨昇叙ノ御沙汰無之、尚特別ノ御家柄ニ付、重テ詮議致候モ、右ノ次第ニテ甚ダ遺憾ニ候得共、不悪御了承相成度旨、有之候ニ付、折返シ交渉致候共、詮議ノ余地無之段、有御座候間、右様御承知相成度、此段及御照会候也  
大正九年九月廿一日 嵩原安亘  
伊是名朝睦殿

前後関係からは、尚典死去を実際の20日ではなく22日とした経緯にも関わりがありそうだが、これ以上の詳細は不明である。加えて、伊是名から嵩原宛に、「沖縄以外ノ御通知ハ、東京ニテ準備アリタシ」との電報が届いている<sup>61</sup>。

9月22日、伊是名から嵩原宛に「侯爵様、今朝八時薨去遊バサル、御葬儀ハ二六日後二時、宮内省オ始メ、

御通知方頼ム」との電報が届く。「死亡診断書」の死亡日も22日とされ、宮内大臣宛「死亡届」、貴族院議長宛「薨去届」、華族会館宛「御届」も22日として提出されている<sup>62</sup>。

9月23日、漢那・神山との打合せに基づき、「御通知状」が発送される。「父従二位侯爵尚典、予テ病氣ノ處、本月二十二日午前八時、沖縄ニ於テ薨去致候」として、「葬儀ハ来ル二十六日午後二時、同地ニ於テ仏式ヲ以テ執行可致候」と述べられていた。また、差出人は、尚典の息子4名（尚昌、尚景、尚旦、尚暢）に加えて、親戚総代として尚順男爵、今帰仁朝英男爵とともに、小笠原長幹伯爵の名が並んだ。「御通知状」は「従来御交際ノ方」として105名（団体有）、「宮内庁側」として261名（団体有）、「貴族院側」として363名、それぞれ記録されている<sup>63</sup>。

23日付で出された新聞広告（時事・朝日・日々）も、同じく尚典の息子4名と親戚総代3名の名前で出されている。また、26日午後2時からの「遥拝式」についても、23日付で「侯爵 尚家々扶」名にて新聞広告が出されている<sup>64</sup>。

そして、「従二位様薨去ニ付賦職」として、東京詰家扶・嵩原を「総監督」とする体制が23日から26日にかけて敷かれることとなる。「受付係」のべ5名、「接待係」のべ7名、「遥拝式場係」2名、「文書係」3名、「給仕」2名、「御茶煮」3名、「下足番」3名の陣容である。また、「御控所」として、「洋館御客間」には「上御客」、「同二階御客間」には「県人各位並新聞記者各位」、「御居間」には「御近親方」と3か所に区分し、「各係員心得」を定めて対応している<sup>65</sup>。

9月24日、尚昌一行が沖縄に到着。同日には、尚昌名にて宮内大臣宛に「忌服届」が出されている。「忌五十日」は「自大正九年九月二十二日至同十一月十日」、「服十三月」は「自大正九年九月二十二日至大正十年十月二十二日」とされた<sup>66</sup>。

そして、9月26日、首里での葬儀と時間を合わせる形で、東京尚家邸では御遥拝式が行われる。午後2時、嵩原家扶が御開扉を行い、御焼香が始まる。まずは「若様」（裕）、「御姫様」（文子）の順に、嵩原や世話役の付添のもと焼香を行う。以下、漢那憲和、神山政良・八重子（尚泰六女）、護得久朝光（護得久朝惟次男）、幸地朝績（尚泰娘婿）、大城朝申（尚順娘婿）、さらに、小笠原長幹・貞子、小笠原豊（尚百子兄）、津軽照子、津軽義孝（伯爵、津軽英麿養子）が順次焼香を行った。次に「家扶以下御家職一同」、「県人各位其他」と続き、午後3時半に御遥拝式は終了している。「御遥拝参拝」として、184名（団体有）が記録されている。また、「御弔詞状受領」として77名（団体有）、「御弔電受領」として16名（団体有）が記録されている。「従二位様薨去日記」には、貴族院、日本赤十字社社長、麹町区公民会会長、帝国海事協会理事長からの弔詞が特に記録されている<sup>67</sup>。

「御供物御香典」記録の筆頭には小笠原長幹・貞子、続いて津軽義孝、津軽照子が記され、それぞれ、「御菓子式盛」「水御菓子壺台」「生花壺対」などとあり、これらが御遥拝式場設営の際に「御供物」として用いられたものと思われる。「御供物御香典」記録には、233名（団体有）が記されている<sup>68</sup>。

御葬儀（御遥拝式）翌日の9月27日には、小笠原伯爵家、津軽伯爵家に嵩原家扶が御礼のため参上している。また、27日付にて尚昌名で新聞広告（時事・朝日・日々・国民）を出すとともに、御礼状も三種類に分けて発送している<sup>69</sup>。

葬儀の後、尚昌・百子は、11月16日に沖縄を出発し、21日に帰京している。この間、10月20日には皇居にて襲爵の辞令書交付があり、「親族ノ内代理トシテ」小笠原長幹伯爵が参内している<sup>70</sup>。

## 2. 尚典葬儀以降の動向

尚典が病弱で、尚昌との二元体制化が進行していたとはいえ、毎年の予算書を東京尚家邸から家扶もしくは家扶心得が帰県して提出するなど<sup>71</sup>、依然として家政の中心は尚典が在する中城御殿であった。だが、尚典から尚昌へと家督が承継されることで、後述のように東京尚家邸の地位が向上していくことになる。

1921年9月20日の尚典一周忌に際して、尚昌は沖縄に帰省する（9月10日東京発、10月19日東京着）。9月20日には、東京尚家邸でも御遥拝式が行われている。まず百子が遥拝した後、尚旦、尚暢、裕、文子、清子、尚光夫妻、漢那政子、護得久朝惟、神山政良夫妻、尚謙（尚順長男）、幸地朝績の順に親族が参拝、さらに、小笠原・津軽両伯爵家使者の代拝の後、家扶以下家職一同奥女中らが参拝している<sup>72</sup>。

1922年4月11日、松川御殿（尚泰夫人）が首里で死去し、13日に葬儀が行われる。同日には、「故従二位



様ノ御例ノ通り」、東京尚家邸では御遥拝式が行われている。「御焼香」は尚昌に始まり、百子、裕、文子、清子、尚光夫妻、尚旦夫妻、尚暢、漢那政子、神山政良夫妻、護得久朝章、護得久朝光、幸地朝績と続き、さらに、津軽照子、小笠原伯爵「御使」の後、嵩原家扶室、御家職一同御女中らが行っている<sup>73</sup>。

4月17日、尚昌は「故松川様御焼香ノ為メ」、尚旦、尚光夫妻、尚謙らと東京を出発する。21日に沖縄に到着し、5月4日まで滞在する間に、尚昌は中城御殿の改革を行っている。その内容は、伊是名朝睦家扶と伊波興廷庶務課長を退職させ、百名朝敏会計課長を家扶心得に昇進させること、その他家職を減員すること、「御茶湯詰以下各小者、従来ノ職名ヲ改正ノ上人員減少」すること、などであった。結果として、尚泰時代からの古参である伊是名と伊波が退任し、その他家職は19名から13名、「御茶湯詰以下各小者」は「給仕以下各小者」に名称を変えて35名から28名へと減員した。一方、このとき東京側には人事は起こっていない<sup>74</sup>。中城御殿の改革は、尚典死去後の首里から東京へのシフトを意味したと考えられる。

9月20日の尚典三回忌に際し、再び尚昌は沖縄に帰省している（9月7日東京発、10月18日東京着）。前年の一周忌と同様、東京尚家邸では御遥拝式が行われた。「御焼香」順は次の通りである。百子に始まり、裕、尚旦、尚暢、文子、清子、尚光夫妻、漢那政子、神山政良夫妻、尚謙、幸地朝績、護得久朝光、佐久真さち子と続き、さらに、小笠原貞子、津軽伯爵「御代拝」の後、御家職一同並御女中らが行っている<sup>75</sup>。

尚昌への代替わり以降、東京尚家邸が中心となるなかで、法事における、県内親族に加えて県外親族である小笠原伯爵家、津軽伯爵家の存在が定着している様子がうかがえる。

### 3. 尚昌葬儀

代替わりも順調に進み、尚侯爵家は盤石かと思われた矢先、1923年6月19日に尚昌は「虫様突起炎」にて急逝する<sup>76</sup>。尚昌は、4月9日から5月19日にかけて、百子とともに上海旅行を楽しんだが、帰国後10日にして体調を崩し、20日程の療養の後、帰らぬ人となった<sup>77</sup>。

「大正十二年六月 尚昌侯御葬送日誌 第壱巻 尚家」<sup>78</sup>、「大正十二年六月 尚昌侯御葬送日誌 第貳巻 尚家」<sup>79</sup>、「大正十二年六月 尚昌侯御葬送日誌 第参巻 尚家」<sup>80</sup>の3冊（以下、「尚昌侯御葬送日誌」）は、1923年に東京にて死去した尚昌の葬儀に関する記録である。そのうち特に「第壱巻」は、2021年以降に公開された新史料であり、これにより葬儀の詳細を確認することが可能となった。尚典葬儀との比較も意図しつつ、動向を確認していく。

「尚昌侯御葬送日誌」は、「御親族会議決定事項ニ基キ御卒去当日ヨリ御四十九日」までの記録をまとめたものとされる<sup>81</sup>。この史料は尚典の葬儀記録である「従二位様薨去日記」と同様、東京での死去直後から葬儀に向けた沖縄との電報でのやり取りや諸届などの経過がわかるだけでなく、尚典から尚昌への代替わりによって尚侯爵家の中心が東京に移っており、葬儀も東京にて行われたことから、本葬の詳細を知ることが可能となっている。

6月19日未明、危篤の報を受けて、「御近親」が集合している。「尚昌侯御葬送日誌」に記録されているのは順に、小笠原長幹、小笠原長丕、小笠原豊、津軽照子、尚暢、尚旦夫妻、尚光夫妻、護得久朝惟、護得久朝光、漢那政子、神山政良夫妻、幸地朝績、尚謙、佐久真咲子の17名である<sup>82</sup>。

そして、「御病氣御危篤ノ旨、宮内大臣ニ内申」する。尚昌死去直後には、東京詰家扶・嵩原が沖縄詰家扶心得・百名に対し、「殿様一〇一〇プン御卒去、恐懼ニ堪ヘズ、宮内省へ叙位等ノ手続中、後知ラセル迄、絶対ニ新聞其他へ発表待テ」との電報を送っている。尚昌は、危篤の段階で19日付にて「特旨ヲ以テ正四位ニ陞叙」されるとともに、天皇皇后から「御見舞トシテ、御紋章付銀製花瓶壺対御下賜」された。さらに死去後には、天皇皇后より「祭資金五百円也下賜」される<sup>83</sup>。尚典と比して尚昌はまだ若く、上位ではなかったことから叙位が実現したものと考えられる。

尚典とは異なり、「死亡診断書」の死亡日は実際の19日であり、麹町区長宛「死亡届」のほか、宮内大臣、貴族院議長、侯爵会、櫻友会、華族会館長、麹町公民会、東京倶楽部、国際連盟協会にそれぞれ宛てて「卒去届」が提出されている<sup>84</sup>。

「尚昌侯御葬送日誌」には、「一、左ノ御近親御協議ノ上、御葬式ハ東京ニテ土葬行ハルヽ事ニ御決定」という文章に取り消し線が引かれ、「御協議員」と修正された上で、小笠原長幹、小笠原豊、小笠原長丕、尚旦、尚光、尚暢、護得久朝惟、護得久朝光、神山政良、幸地朝績、嵩原安亘の11名の名前が記されている。実際、

嵩原から百名宛に「御葬式ハ、東京ニテ土葬行ハルル事ニ御決定」、尚且から尚順宛に「東京ニテ御埋葬ノ件、御異議ナキ様、御執成ヲ乞フ」との電報が続けて送られている<sup>85</sup>。

「尚昌侯御葬送日誌」には、さらに次のような経緯が記されている<sup>86</sup>。

一、御埋葬ノ儀、最初

野嵩様ハ沖縄ニテ被仰付候思召ニ御座候處、尚且様ヨリ電報ヲ以テ御願申上ケラレ候ニ付、御承諾被遊申候、電文左ノ通り

一、東京ニテ御埋葬兄上御意志ニ承ハル、是非御執成シ偏ニ祈ル、何レ帰国ノ上、母上御意志ニ背ク御詫申シタシ

尚順 尚且

一、御手当効ナク遺憾ニ堪ヘズ、御心痛察シ奉ル、東京ニテ御埋葬兄上御遺志ニ承ハル、忤テ御願申上グ  
尚祥子 尚且

尚泰、尚典は首里の玉陵に葬られた。尚昌の母である祥子（野嵩御殿）の意志は沖縄での埋葬であったのに対して、尚昌本人の遺志を受けて、尚且が説得を行い、東京での埋葬となったことが確認される。

また、御寺は浅草区松葉町の海禅寺（臨済宗妙心寺派）、御墓地は上野櫻木町の津梁院（臨済宗妙心寺派）内とされた。海禅寺は小笠原伯爵家の墓所であり、首里の円覚寺も臨済宗妙心寺派であった。また、津梁院は津軽伯爵家の菩提寺である。いずれも小笠原・津軽両家とゆかり深い寺である。御墓地は、約百坪の土地を購入して整備されたが、「墓地一切ノ準備ハ該墓地ノ所有者タル上野寛永寺津梁院（今后当邸ノ墓守タル可キモノナリ）ニ於テ一切請負」わせている。「御墓地壹百坪周囲ハ建仁寺垣ヲ設ケ、表門通用門ヲ設ケ、扉ハ両開ニシテ締リヲナセリ」とされたほか、「御墓地南表ニ九尺角ノ小屋ヲ建テ、家職交代ニ詰メ、御四十九日迄奉仕小使老人」としている<sup>87</sup>。

「御仏壇ハ洋館中央ニ設ケ」られ、20日午後3時には、「御入棺式」が行われる。「御棺ハ檜材壹寸五分厚板二重仕立ニテ白紋羽二重覆御掛ケ」であり、「御仏壇ニ御安置」される。「御喪主裕様、御後室様、文子様、清子様、御近親御方々ノ御焼香」がなされた。「御供物ハ、御菓子、御水菓子、御霊膳、御香炉、御茶湯、御燈明、御花、並御近親方々及び其他ヨリノ御供物」であった<sup>88</sup>。

同20日には、次の案文に基づき「御卒去御通知」が發送される。「父正四位侯爵尚昌、予テ病氣ノ處、本月十九日午後十時卒去致候」として、「追テ来ル廿四日午前十時ヨリ十二時マデ、富士見町邸ニ於テ仏式ヲ以テ告別式執行可致候」と述べられていた。差出人には、尚裕のほか、尚昌の弟2名（尚且、尚暢）に加えて、親戚として尚順男爵の名が並んだ。「御卒去御通知」の送付先として、332名（団体有）が記録されている<sup>89</sup>。

同じく20日付で出された新聞広告には、親戚総代として尚順のほか、男爵今帰仁朝英、伯爵小笠原長幹が加えられた。また、在京沖縄県人会名義でも新聞広告が出されている。どちらも21日に「朝日、時事、報知、国民、日々」、22日に「毎日」に掲載されたと記録されている<sup>90</sup>。なお、中城御殿においても、22日付で沖縄地元3紙（琉球、朝日、タイムス）に広告を出している。そこには親戚総代として、男爵尚順、男爵尚琳、男爵今帰仁朝英、男爵伊江朝助、玉城尚秀、尚光、尚時の7名の名が記された<sup>91</sup>。

そして、「御葬儀前事務分担」として、「総務係」3名、「受付係」7名、「応接間係」3名、「御香典並御供物捧供係」10名、「御弔問芳名記録御香典記録御供物記録係」9名、「御霊前御供物係」2名、「御僧侶係」3名、「新聞記者新聞広告挨拶状類印刷新聞記事蒐録係」2名、「葬儀社係」4名、「御墓地係」8名、「電話係」3名、「庶務係」5名、「電話並奥トノ交渉係」1名の計60名（兼職有）が組織される。総務係には神山政良、小笠原豊、嵩原安亘の3名が就いており、全体を総括したものと思われる。19日から23日まで5日間の「御通夜」には、「御親族」のべ29名、「御家職並果人」のべ76名、ならびに「特別御通夜御人名」として「御同窓」などの21名が記録されている。19日から26日まで、臨時電話も設置された<sup>92</sup>。

6月24日の告別式に際しては、別途「告別式当日役割」が定められている。大きく「御式場」、「御葬場」、「庶務」に分けられ、のべ100名で次のような分担となっていた（兼任有）<sup>93</sup>。

## 御式場

- (一) 御祭事部／一、御僧侶係 4名／二、御供物係 2名／三、御焼香係 1名／四、御発柩係 5名／五、自動車係 2名
- (二) 御接待部／一、受付係 22名／二、御携帯品並下足係 9名／三、車馬係 2名／四、新聞記者係 3名／五、礼状発送係 18名

## 御葬場

- (一) 墓地係 3名／(二) 事務係 6名

## 庶務

- (一) 会計係 2名／(二) 庶務係 7名／(三) 電話係 3名／(四) 御留守居係 10名／(五) 衛生係 1名

「告別式当日事務執行心得」も作成され、各係の役割が細かく記されている<sup>94</sup>。また、「御休憩所」として、「有位有爵者方」には「洋館御二階」、「御親族方」には「日本館御客間」、「御僧侶」には「表御二階」、「県人」には「表御二階下」、「警官」には「天幕張小屋」と5か所に区分していた。「警官」は、麹町警察署に「御葬列ノ護衛並邸前ノ警衛」を依頼したものである<sup>95</sup>。

6月24日は、まず午前8時から御棺前祭（御霊前祭）が執行される。事前（21日付）に案内が送られたのは、尚光夫妻、漢那憲和夫妻、神山政良夫妻、幸地朝績、城間令夫人、小笠原長幹夫妻、津軽照子、小笠原長丕、小笠原豊、小笠原登代子、津軽義孝、深野半蔵夫妻の17名である<sup>96</sup>。「告別式順序次第書私案」によれば、「読経」「御家族並ニ御近親ノ御焼香」「参列者焼香」の順に進められたとされる<sup>97</sup>。

続いて、午前10時から一般告別式が行われる。「御礼拝順序」は、尚裕から始まり、野嵩御殿（百子代拝）、百子、文子、清子、尚旦、光子（美津子）、尚暢、尚光、尚福子、尚明、尚英、護得久朝惟、護得久朝光、漢那政子、漢那幸子、神山政良、神山八重子、幸地朝績、尚謙、金武朝健、佐久間咲子、城間千代子（代拝）、城間綾子（代拝）の後、小笠原長幹、小笠原貞子（代拝）、小笠原登代子、津軽照子、小笠原長丕、小笠原豊、小笠原明子、小笠原春枝、小笠原富士子、小笠原鞠子、小笠原忠春、小笠原松子、小笠原忠幸、小笠原福子、小笠原忠統、小笠原忠如、津軽義孝、深野半蔵と続き、最後に御家職一同、在郷軍人会沖縄支部代表當間恵榮、在京沖縄県人会代表銘苅正太郎が続く<sup>98</sup>。

そして、午後1時には出棺となり、自動車の車列によって、墓地のある津梁院に30分程で到着する。「御道筋」は、「御本邸御出門シテヨリ九段坂ヲ下リ、左ニ飯田橋通り、飯田橋ニ出テ江戸川ニ沿ヒ、大曲ヲ右ニ安藤坂ヲ上リ、電車通りヲ右ニ坂ヲ下リ、春日町ヲ経テ本郷三丁目ニ出テ左折、帝大前高等学校ニ沿ヒ右ヘ弥生町通り坂ヲ下リ、逢初橋ヲ渡リ善光寺坂ヲ上リ、寛永寺坂ヲ左ニ曲リテ右ニ津梁院ニ至ル」というものであった。御埋葬式の後、午後4時には東京尚家邸に帰邸している。午後5時には「御僧侶御読経、御家族御親族御焼香」が行われ、「御式終了」となった<sup>99</sup>。

東京詰家扶・嵩原から沖縄詰家扶心得・百名宛の報告案（6月27日付）<sup>100</sup>では、「御弔問ノ御方」として「公爵近衛文麿殿同令夫人、侯爵徳川圀順殿、侯爵細川護立殿、侯爵徳川義親殿」、「告別式御参拝ノ御方」として「公爵徳川家達殿、前記ノ各公侯爵」を特に列举している。また、「御奥向キノ御用」については、「津軽御後室様御始メ、美津子様、福子様、政子様、八重子様之御方々ニテ御後室様御子様方ノ御世話ナサレ」、「御表向御用」については、「小笠原伯爵様、旦様、光様、護得久朝惟様、同朝光様、神山政良様、幸地朝績様、小笠原長丕様、同豊様、御世話役トシテ御家職一同、県人ノ重ナル人々、式部職ノ属官四人、小笠原伯爵家御家職、津軽伯爵家御家職等、協力諸般ノ御準備ヲ致シ」たとされる。

既述のように、「御葬儀前事務分担」として、のべ60名が組織され、「告別式当日役割」においても、のべ100名が組織されているが、尚昌葬儀は、尚侯爵家の親族・家職や県人だけでなく、式部職属官、小笠原伯爵家家職、津軽伯爵家家職の協力のもとで行われたのである。史料上の制約により、さらなる検討は困難だが、1915年の婚礼以降に培われた小笠原伯爵家、津軽伯爵家との結びつきは、御寺・御墓地の選定を含め、尚昌葬儀に際して重要な役割を担ったといえよう。

#### Ⅳ おわりに

本稿では、尚典、尚昌の葬儀がどのように変遷していくのかについて、主に「尚家文書」を用いながら明らかにしてきた。特に、当該期の「尚家文書」が東京尚家邸において作成・保管されたものであり、さらには、詳しい経過や心情まで確認できることがまれなため、傍証を積み重ねていくことが必要であることから、小笠原伯爵家との婚姻前後の尚侯爵家における婚礼や正月儀礼の変化などをふまえつつ、葬送儀礼が変遷していく過程を検討してきた。

1901年の尚泰死去以降、尚典は首里に留まることが多くなり、1906年以降はついに上京することはなかった。そうしたなかで、尚昌が留まる東京との二元体制が次第に形成され、尚昌が英国留学から帰国した後は一層明確となっていく。小笠原伯爵家・百子との婚姻以降、その姉・照子が嫁いだ津軽伯爵家とともに、東京尚家邸における県外親族との結びつきは深まっていく。また、百子との婚礼が小笠原流で行われたことを契機に東京尚家邸の儀礼の「日本風」化は進み、1920年の尚典死去による尚昌への代替わりによって、家政の中心も東京尚家邸へと移行することとなる。

1923年に尚昌が急逝すると、葬儀は尚侯爵家に加え、小笠原伯爵家・津軽伯爵家の家職なども協力する形で行われた。尚昌の遺志により、東京での埋葬が決まるが、埋葬地とされたのは、東京における近世以来の津軽家菩提寺・津梁院の境内地であった。また御寺は小笠原伯爵家の墓所・海禅寺とされた。尚昌の遺志が示された具体的な史料を確認することは出来ないが、尚昌が東京に埋葬されることとなった要因として、小笠原伯爵家との婚姻関係は大きかったといえる。

「尚家文書」を用いることで明らかに出来たことも多いが、冒頭で述べたように、「尚家文書」には史料群としての限界もある。尚昌の英国留学や式部官としての活動などについての検討を行うことで、東京での埋葬にいたる要因がより重層的に見えてくるものと考えている。近代華族研究のなかに尚家を位置づけることも重要である。今後の課題としたい。

#### 付記

本稿は JSPS 科研費 20K00980、24K04246 による成果の一部である。

#### 注

<sup>1</sup> 藤本仁文「明治三四年尚泰の葬儀と旧琉球王国」(『京都府立大学文化遺産叢書 第15集』京都府立大学文学部歴史学科、2019年)。

<sup>2</sup> 伊集守道・鈴木悠「尚典の葬送について」(前掲『京都府立大学文化遺産叢書 第15集』)。

<sup>3</sup> 国宝未指定分「尚家文書」の公開経緯については、拙稿「国宝未指定分「尚家文書」についての基礎的考察」(『歴史研究』60、2023年)を参照。

<sup>4</sup> 前掲拙稿「国宝未指定分「尚家文書」についての基礎的考察」。

<sup>5</sup> 倉成多郎「近代尚家日記にあらわれる丁子風炉について」(『壺屋焼物博物館紀要』24、2023年)。

<sup>6</sup> 内山一幸『明治期の旧藩主家と社会—華士族と地方の近代化—』(吉川弘文館、2015年)、原口大輔『貴族院議長・徳川家達と明治立憲制』(吉田書店、2018年)、など。主に旧藩主家を対象とした近年の近代華族研究の動向については、内山一幸「旧藩主家と旧藩社会」(『歴史評論』864、2022年)を参照。

<sup>7</sup> 尚泰の葬儀については、前掲「明治三四年尚泰の葬儀と旧琉球王国」を参照。

<sup>8</sup> 「明治三十四年丑 日記 外事課」(那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1069)、8月23日条、10月17日条。比屋根安定によれば、尚泰死去によって「明治初期以来の側近にも移動が生じ、代わって伊是名朝睦、百名朝計たち新人が上京した」という(比屋根安定「尚家の人たち(3)」『沖縄タイムス』1967年11月14日)。

<sup>9</sup> 「明治三十五年 日記 尚家」(那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1093)、5月14日条、7月27日条、8月9日条、20日条、29日条。なお、1903年7月16日から9月10日にかけて、尚昌は上海な



ど「南清」への「支那御漫遊」を行っている（「明治三十六年 日記 尚家」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1394）、7月16日条、9月10日条）。

<sup>10</sup> 「明治三十八年起 日記 尚家」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1396）、12月29日条、「明治三十九年 日記 尚家」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1397）、4月15日条。

<sup>11</sup> 「明治四十年一月 日記 尚家」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1398）、7月1日条、8月3日条、9月2日条。

<sup>12</sup> 「明治四十一年 日記 尚家」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1399）、4月10日条、4月30日条。尚泰時代の家政改革については、鈴木悠「「尚家文書」所収の近代資料について—近代尚家の家政改革にかかる史料を中心に—」（『歴史研究』60、2023年）を参照。

<sup>13</sup> 「嵩原安亘」（檜原友満編『沖縄県人事録』沖縄県人事録編纂所、1916年）、225頁。

<sup>14</sup> 「大名華族の家庭 昔の琉球王 尚侯爵家（上）」（『東京朝日新聞』1908年4月20日）。

<sup>15</sup> 前掲「明治四十一年 日記 尚家」、10月26日条。

<sup>16</sup> 「明治四十二年 日記 尚家」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1400）、7月2日条、3日条、5日条、8日条、11日条、13日条、29日条、など。なお、尚典の「死亡診断書」では、「病死病名」は「肺結核」、「発病ノ日」は「明治四拾壹年〔1908〕九月不詳日」となっている（「大正九年九月 従二位様薨去日記 尚家」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1389）、12コマ）。「日記」以外については、デジタルデータ化（PDF ファイル）の撮影画像順をコマ番号として示している（以下同）。

<sup>17</sup> 前掲「明治四十二年 日記 尚家」、6月19日条、7月29日条、8月22日条、10月28日条、12月3日条。

<sup>18</sup> 「明治四十三年 日記 尚家」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1401）、12月28日条、29日条、30日条。尚順は、1890～91年頃、自身の英国留学が「頑固党」の反対などで白紙になったことをのちに語っている（「あの頃を語る 極端な医者嫌ひの父、尚泰を語る／頑固党には悩まざる／男爵尚順さんの思出話（下）」『琉球新報』1932年3月27日）。

<sup>19</sup> 「明治四十四年一月起 日記 尚家」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1402）、1月9日条、3月10日条、4月2日条。

<sup>20</sup> 「尚侯世嗣渡欧留別会（那覇）」（『東京朝日新聞』1911年5月3日）。

<sup>21</sup> 前掲「明治四十四年一月起 日記 尚家」、5月11日条、23日条、30日条、6月9日条、7月4日条、18日条、など。ホノルルでの歓迎については、「明治四拾四年 庶務書類 尚家」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1424）、248～253コマ、260～261コマ、など参照。

<sup>22</sup> 「大正三年一月以降 日記 尚家」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1405）、11月22日条、12月7日条、29日条、31日条、「大正四年一月以降 日記 尚家」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1406）、1月4日条、6日条、7日条、9日条、30日条、5月4日条。

<sup>23</sup> 「大正三年壹月以降 庶務書類綴 尚家」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1427）、588コマ。

<sup>24</sup> 「大正四年壹月以降 庶務書類綴 尚家」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1428）、27～29コマ。

<sup>25</sup> 前掲「大正四年一月以降 日記 尚家」、3月4日条、21日条、前掲「大正四年壹月以降 庶務書類綴 尚家」、76コマ。

<sup>26</sup> 前掲「大正四年一月以降 日記 尚家」、6月25日条、7月1日条、3日条、4日条。

<sup>27</sup> 前掲拙稿「国宝未指定分「尚家文書」についての基礎的考察」、8頁。7月11日には、尚昌が伊藤博邦公爵を訪問しており、媒酌人の件を自ら依頼したものと思われる（前掲「大正四年一月以降 日記 尚家」、7月11日条）。

<sup>28</sup> 前掲「大正四年一月以降 日記 尚家」、7月7日条、17日条。

<sup>29</sup> 前掲「大正四年壹月以降 庶務書類綴 尚家」、298～301コマ。なお、報告には、席次、献立、装飾も添付されている。

<sup>30</sup> 前掲「大正四年一月以降 日記 尚家」、7月18日条、20日条、24日条、29日条。翌30日には、『琉球新報』でも「尚昌氏婚約」として報じられている（「尚昌氏婚約」『琉球新報』1915年7月30日）。

- <sup>31</sup> 前掲「大正四年杓月以降 庶務書類綴 尚家」、314～337 コマ。
- <sup>32</sup> 前掲「近代尚家日記にあらわれる丁子風炉について」、2 頁、5～6 頁。
- <sup>33</sup> 前掲「大正四年一月以降 日記 尚家」、8 月 2 日条、4 日条、10 日条、23 日条、30 日条。滞在に際して、8 月 20 日以内に園遊会を行う計画もなされている（同前、7 月 27 日条）。
- <sup>34</sup> 「東人西人」（『東京朝日新聞』1915 年 8 月 18 日）。
- <sup>35</sup> 「尚昌君」（前掲『沖縄県人事録』）、493 頁。
- <sup>36</sup> 前掲「大正四年一月以降 日記 尚家」、10 月 25 日条、12 月 13 日条、14 日条。
- <sup>37</sup> 「婚礼式は小笠原流／旧琉球王の慶事／新婦は伯爵令妹」（『読売新聞』1915 年 11 月 25 日）。
- <sup>38</sup> 前掲「大正四年一月以降 日記 尚家」、11 月 6 日条、22 日条。
- <sup>39</sup> 前掲「大正四年一月以降 日記 尚家」、12 月 14 日条。
- <sup>40</sup> 前掲「大正四年杓月以降 庶務書類綴 尚家」、512～542 コマ。「御婚礼」翌日には、『琉球新報』で概要が報じられている（「尚家の慶事」『琉球新報』1915 年 12 月 15 日）。
- <sup>41</sup> 前掲「大正四年杓月以降 庶務書類綴 尚家」、531～542 コマ。
- <sup>42</sup> 前掲「大正四年杓月以降 庶務書類綴 尚家」、533～534 コマ。
- <sup>43</sup> 前掲「近代尚家日記にあらわれる丁子風炉について」、7 頁。
- <sup>44</sup> 前掲「近代尚家日記にあらわれる丁子風炉について」、7 頁。
- <sup>45</sup> 前掲「明治四十四年一月起 日記 尚家」、1 月 1 日条、「大正五年一月以降 日記 尚家」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1407）、1 月 1 日条。
- <sup>46</sup> 前掲「大正五年一月以降 日記 尚家」、1 月 3 日条、「大正六年一月起 日記 尚家」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1408）、1 月 10 日条、「大正七年杓月 日記帳 尚家」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1409）、1 月 3 日条、4 日条。
- <sup>47</sup> 「大正九年一月以降 日記 尚家」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1411）、1 月 4 日条。
- <sup>48</sup> 「大正十一年一月以降 日記 尚家」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1413）、1 月 4 日条。
- <sup>49</sup> 拙稿「1920 年代前半における尚侯爵家について―尚典・尚昌・尚裕の代替わりに注目して―」（『沖縄文化研究』51、2024 年）、212～214 頁。
- <sup>50</sup> 「大正三年三月吉日 尚光殿御婚礼日記 尚家庶務係」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1384）、16～17 コマ。「大正七年十二月吉日 尚旦殿御婚礼日記 尚家」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1388）、19～20 コマ。
- <sup>51</sup> 前掲「大正七年十二月吉日 尚旦殿御婚礼日記 尚家」、14 コマ。「政子様」とは、1909 年 12 月 20 日に行われた政子と漢那憲和との「御婚礼」のことであり、この時の「媒酌」は奈良原繁である（「明治四十二年十二月 政子様御婚礼日記 尚家」那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1383、3 コマ）。
- <sup>52</sup> 前掲「大正九年九月 従二位様薨去日記 尚家」。
- <sup>53</sup> 前掲「大正九年一月以降 日記 尚家」。
- <sup>54</sup> 首里での葬儀については、前掲「尚典の葬送について」を参照。
- <sup>55</sup> 前掲「大正九年九月 従二位様薨去日記 尚家」、3 コマ、5～6 コマ。
- <sup>56</sup> 前掲「大正九年九月 従二位様薨去日記 尚家」、4 コマ。
- <sup>57</sup> 前掲「大正九年九月 従二位様薨去日記 尚家」、4～6 コマ。
- <sup>58</sup> 前掲「大正九年九月 従二位様薨去日記 尚家」、6～7 コマ。
- <sup>59</sup> 前掲「大正九年一月以降 日記 尚家」、9 月 21 日条。
- <sup>60</sup> 前掲「大正九年九月 従二位様薨去日記 尚家」、7 コマ。
- <sup>61</sup> 前掲「大正九年一月以降 日記 尚家」、9 月 21 日条。
- <sup>62</sup> 前掲「大正九年九月 従二位様薨去日記 尚家」、8 コマ、11～14 コマ。
- <sup>63</sup> 前掲「大正九年九月 従二位様薨去日記 尚家」、16 コマ、42～83 コマ。
- <sup>64</sup> 前掲「大正九年九月 従二位様薨去日記 尚家」、16～17 コマ。
- <sup>65</sup> 前掲「大正九年九月 従二位様薨去日記 尚家」、8～11 コマ。なお、東恩納寛惇が「遥拝式場係」を務めている。

- <sup>66</sup> 前掲「大正九年九月 従二位様薨去日記 尚家」、17～18 コマ。
- <sup>67</sup> 前掲「大正九年九月 従二位様薨去日記 尚家」、19～21 コマ、93～106 コマ。津軽英麿は 1919 年 4 月 5 日に死去している。
- <sup>68</sup> 前掲「大正九年九月 従二位様薨去日記 尚家」、19 コマ、21～29 コマ。
- <sup>69</sup> 前掲「大正九年九月 従二位様薨去日記 尚家」、30～31 コマ。
- <sup>70</sup> 前掲「大正九年一月以降 日記 尚家」、10 月 18 日条、20 日条、11 月 16 日条、21 日条。
- <sup>71</sup> 例えば、1915 年の「百名家扶心得、会計係書記桑江夢然、予算書提出ノ為帰県」（前掲「大正四年一月以降 日記 尚家」、3 月 23 日条）、1917 年の「仲里家扶心得予算提出ノ為メ帰県ノ途ニ就ク」（前掲「大正六年一月起 日記 尚家」、3 月 28 日条）、1919 年の「嵩原家扶予算提出ノ為帰県、山川家従随得」（「大正八年一月 日記 尚家」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1410）、4 月 21 日条）、など。
- <sup>72</sup> 「大正十年一月以降 日記 尚家」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1412）、9 月 10 日条、20 日条、10 月 19 日条。「大正十年壱月以降 庶務書類 尚家」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1432）、692～694 コマ。
- <sup>73</sup> 「大正十一年四月 松川様御逝去日記 尚家」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1391）、3 コマ、5～6 コマ。
- <sup>74</sup> 前掲拙稿「1920 年代前半における尚侯爵家について」、214～217 頁。
- <sup>75</sup> 前掲「大正十一年一月以降 日記 尚家」、9 月 7 日条、20 日条、10 月 18 日条。
- <sup>76</sup> 「大正十二年六月 尚昌侯御葬送日誌 第壱巻 尚家」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1393）、23 コマ。
- <sup>77</sup> 前掲拙稿「1920 年代前半における尚侯爵家について」、220 頁。病床時については、「大正十二年六月 尚昌侯御病床日誌 尚家」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1392）を参照。
- <sup>78</sup> 前掲「大正十二年六月 尚昌侯御葬送日誌 第壱巻 尚家」。
- <sup>79</sup> 「大正十二年六月 尚昌侯御葬送日誌 第貳巻 尚家」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1190）。
- <sup>80</sup> 「大正十二年六月 尚昌侯御葬送日誌 第参巻 尚家」（那覇市歴史博物館所蔵「琉球国王尚家関係資料」1191）。
- <sup>81</sup> 前掲「大正十二年六月 尚昌侯御葬送日誌 第壱巻 尚家」、4 コマ。なお、「第壱巻」には主に御卒去当日から告別式まで、「第貳巻」には「御礼状案文及発送先」や「沖縄御邸ヨリ報告」など、「第参巻」には主に初七日から四九日までの記録が収められている。
- <sup>82</sup> 前掲「大正十二年六月 尚昌侯御葬送日誌 第壱巻 尚家」、14 コマ。
- <sup>83</sup> 前掲「大正十二年六月 尚昌侯御葬送日誌 第壱巻 尚家」、14～15 コマ、18 コマ、35 コマ。
- <sup>84</sup> 前掲「大正十二年六月 尚昌侯御葬送日誌 第壱巻 尚家」、22～31 コマ
- <sup>85</sup> 前掲「大正十二年六月 尚昌侯御葬送日誌 第壱巻 尚家」、16～17 コマ。
- <sup>86</sup> 前掲「大正十二年六月 尚昌侯御葬送日誌 第壱巻 尚家」、36 コマ。
- <sup>87</sup> 前掲「大正十二年六月 尚昌侯御葬送日誌 第壱巻 尚家」、39～40 コマ、125 コマ、136 コマ。
- <sup>88</sup> 前掲「大正十二年六月 尚昌侯御葬送日誌 第壱巻 尚家」、147～149 コマ。
- <sup>89</sup> 前掲「大正十二年六月 尚昌侯御葬送日誌 第壱巻 尚家」、52～70 コマ。
- <sup>90</sup> 前掲「大正十二年六月 尚昌侯御葬送日誌 第壱巻 尚家」、70～71 コマ。
- <sup>91</sup> 前掲「大正十二年六月 尚昌侯御葬送日誌 第貳巻 尚家」、55～56 コマ。
- <sup>92</sup> 前掲「大正十二年六月 尚昌侯御葬送日誌 第壱巻 尚家」、18～22 コマ、79 コマ、81～87 コマ。「御弔問ノ方ニ対スル応接」の心得も定められている（同前、37 コマ）。
- <sup>93</sup> 前掲「大正十二年六月 尚昌侯御葬送日誌 第壱巻 尚家」、93～100 コマ。
- <sup>94</sup> 前掲「大正十二年六月 尚昌侯御葬送日誌 第壱巻 尚家」、89～93 コマ。告別式場の設営方法も確認できる（同前、110～111 コマ）。
- <sup>95</sup> 前掲「大正十二年六月 尚昌侯御葬送日誌 第壱巻 尚家」、100～101 コマ。
- <sup>96</sup> 前掲「大正十二年六月 尚昌侯御葬送日誌 第壱巻 尚家」、47～48 コマ。

<sup>97</sup> 前掲「大正十二年六月 尚昌侯御葬送日誌 第壱巻 尚家」、103～104 コマ。

<sup>98</sup> 前掲「大正十二年六月 尚昌侯御葬送日誌 第壱巻 尚家」、118～122 コマ。

<sup>99</sup> 前掲「大正十二年六月 尚昌侯御葬送日誌 第壱巻 尚家」、123～131 コマ、136～137 コマ、142 コマ。

<sup>100</sup> 前掲「大正十二年六月 尚昌侯御葬送日誌 第壱巻 尚家」、147～149 コマ。

Research on the Funerals of Sho Ten and Sho Sho Using “Sho Family Documents”:  
Focusing on Marriage with the Ogasawara Earl Family

SAKURAZAWA, Makoto

Division of Multicultural Education, Osaka Kyoiku University

Summary: In this paper, I examine how the funerals of Sho Ten (1864-1920) and Sho Sho (1888-1923) changed, using the newly released "Sho Family Documents." In 1915, the wedding between Sho Sho and Momoko, a member of the Ogasawara Earl family, was held in the Ogasawara style, which led to a shift toward a "Japanese style" of ceremonies at the residence of the Sho Marquis family in Tokyo. Additionally, Momoko's older sister, Teruko, had married into the Tsugaru Earl family, and the ties between the Sho Marquis family, the Ogasawara Earl family, and the Tsugaru Earl family in the Tokyo Sho family residence deepened. When Sho Ten died in 1920 and was replaced by Sho Sho, rituals were definitively changed to a "Japanese style." Furthermore, when Sho Sho died in 1923, the Ogasawara Earl family and the Tsugaru Earl family became deeply involved in the funeral and burial in Tokyo.

keywords: Sho Family Documents, Sho Ten, Sho Sho, Okinawa